

**科学研究費助成事業 研究成果報告書**

平成 28 年 6 月 14 日現在

機関番号：12603

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2015

課題番号：25370579

研究課題名(和文)外国人児童生徒の学習支援ための「対話型日本語能測定方法」の検証を目指して

研究課題名(英文)Research for improvement of accuracy on DLA

## 研究代表者

小林 幸江 (Kobayashi, Yukie)

東京外国語大学・大学院国際日本学研究院・教授

研究者番号：40114798

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,600,000円

研究成果の概要(和文)：本科研では、教育関係者の協力を得て「外国人児童生徒のためのJSL対話型アセスメント」(以下、DLA)、特に「JSL評価参照枠」の妥当性の検証を目指した。学校では「授業についていける日本語力」(以下、ALP)が最課題である。DLAの実践から子どもの日本語力の現状を把握、ALPを予測し指導につなげることができる。子どもの日本語能力は「JSL評価参照枠」により情報の共有が可能となった。さらに、2014年「特別の教育課程」により日本語指導が制度化され、DLAは今後さらなる普及が予想される。一方、ALPの習得には長い時間がかかるため長期の取り組みが必要となる。本科研は、その第1段階として位置づけられる。

研究成果の概要(英文)：This research aims to improve the accuracy of DLA (Dialogic Language Assessment for Japanese as a Second Language), which was designed for teachers to better understand Japanese language proficiency of "Children of Other Languages" (COL) necessary to study at school in 2012 by the found provided by Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology (MEXT). DLA contains the "JSL Framework of Reference for Japanese Language for School Children" that includes 6 stages, in which the stage of the children's language proficiency can be estimated from the results obtained by DLA. As the new education law promoting Japanese language education for COL began in 2014, DLA is expected to be used widely in schools. This research will provide a strong contribution for further practical use of DLA.

研究分野：日本語教育

キーワード：JSL(第2言語としての日本語) DLA(JSL対話型アセスメント) ALP:(教科学習言語能力) 「JSL評価参照枠」「特別の教育課程」

## 1. 研究開始当初の背景

本科研は、文科省の「外国人児童生徒の総合的な学習支援事業」(平成 22~24 年度)の一環として行われた、委託研究「学校において利用可能な日本語能力測定方法の開発」を基に行われたものである。委託研究では、「対話型日本語能力測定方法 DLA」(以下、DLA: Dialogue Language Assessment)の開発を行った。

外国人児童生徒の日本語教育では、「教科学習の授業についていける日本語力(以下、ALP: Academic Language Proficiency)」の習得が喫緊の課題となっている。DLAの開発以前は、子どもの具体的な日本語能力のイメージが共有されておらず、全国的に利用可能な汎用的な測定方法がなかった。DLAは、その実践を通し子どもの日本語力の現状を把握、ALPを予測し指導につなげることを目指すものである。DLAは、テスターと子どもとの1対1の対話を通し行われることから「支援付きアセスメント」と言われている。そこから得られた子どもの日本語力は、「JSL評価参照枠」により予測される。これは、「在籍学級参加との関係」と支援の段階を6つのステージで表示されており、「話す」「読む」「書く」「聴く」の技能別と全体の二つのタイプの「JSL評価参照枠」がある。これにより全国どこでも同一基準による子どもの日本語力の情報の共有が可能となった。

## 2. 研究の目的

DLAは、文科省の委託研究としてわずか3年で開発されたものであり、その妥当性の検証は不可欠と言える。一方で、子どものALPの習得には長い時間がかかるため、長期の継続的な研究が必要となる。そこで、本科研では、長期の継続的な研究を見据えつつ、DLAの精度を高め、教育現場に資するものとするため、まずは3か年のDLAの実践から得られたデータ、教育関係者の声をもとにDLA、特にその柱となる「JSL評価参照枠」の妥当

性の検証を行うことを目指した。

## 3. 研究の方法

DLAは四技能より構成されているが、本科研では委託研究の体制を引き継ぎ、一つの技能を一人が担当し、それぞれでDLAの実践事例データ、DLAの実践者の声等のデータを収集し研究を進めた。

- ・DLA「話す」: 伊東祐郎
- ・DLA「読む」: 櫻井千穂
- ・DLA「書く」: 菅長理恵
- ・DLA「聴く」: 小林幸江

中島は、全体の指導助言を行った。

科研期間中、上記目標の達成のため、次の2点の達成に努めた。

- (1) 研究協力校を通してDLAデータを収集し「JSL評価参照枠」の妥当性の検証を行う。
- (2) 研究成果の発表を通し教育の現場に還元する。

平時は、月1回スカイプによる研究打ち合わせを開催し、大学の長期休業期間には集中的に打ち合わせを行った。また、研究補助を行う教務補佐として、期間を通して通年で1名大学院生を雇用した。なお、各年の活動は、DLA科研ホームページに詳しい。

## 4. 研究成果

次に、上記(1)(2)の達成状況・成果・課題について述べる。

- (1) 「JSL評価参照枠」の妥当性の検証

### 【達成状況】

これを達成するためには、より多くの多様な言語文化背景を持つ子どもたちのDLAの事例をデータとして集める必要がある。しかし、期間中、データ収集は思うように捗らなかった。それは、文科省委託研究で開発されたDLAの公開が本科研の初年度にずれ込み、教育の現場でのDLAの認知が遅れたことによる。また、DLAの実践のためには、さまざまな準備が必要となることから、DLAの意義は認めつつも、日常の業務で多忙を極める教

育現場では、それを教育に取り込むまでに時間がかかった。

そこで、本科研は、まず協力校を開拓し、そのネットワークを構築することから始まった。初年度には、文科省委託研究の際の研究推進委員で、当初より DLA に深い関心を示していた浜松市教育委員会と提携を結んだ。それにより、科研の期間中に、浜松市の教員研修等で DLA 普及に協力する代わりに、DLA の実践データの提供を受けることになった。同時に、DLA の技能別に精力的に協力校の開拓が進められデータの収集が行われた。しかし、データとして使えるものは、適切に DLA を実践したものに限られる。当初、DLA に対する認識も浅く、提供されたデータは質的に不十分なものが多かった。それに対応するため、2013 年度には、TTW (Tester's Training Workshop) を実施し、同時にデータ提供の協力を呼びかけた。このように、3 か年の前半は DLA データ収集のための環境整備に多くの時間が割かれてしまった。

#### 【成果】

本科研の成果は二つある。一つは、3 か年で得られた DLA の実践データ、教員へのアンケート調査から、「JSL 評価参照枠」(技能別・全体)の六つのステージ分けについて概ね妥当であるとの評価を得られた(2014 年度日本語教育学会春季大会 於創価大学 DLA 科研 HP) ことがある。本科研は既に終了しているが、技能別「JSL 評価参照枠」の検証結果を踏まえ、今年度前半に「JSL 評価参照枠」の修正案を文科省に提案する予定である。

もう一つは、DLA「読む」で、「JSL 評価参照枠」(DLA「読む」)の妥当性の検証の結果を踏まえ、年齢枠に応じた記述を加え、「JSL 評価参照枠」の精緻化の今後目指すべき姿を明示したことである(シドニー大会発表 2014 DLA 科研の HP)。

これは、四技能の中で DLA「読む」を担当

している櫻井千穂が以前より「B-DRA」( Bilingual Developmental Reading Assessment ) の研究を行っており、多くの協力校とのつながりを持っていることから、研究が他の技能に先んじていることによる。

#### 【課題】

子どもの ALP の習得に関する長期的な調査研究が必要となることから、引き続き検証を継続していくことが重要である。本科研は、その第 1 段階と位置付けている。本科研を通し、今後の課題が見えてきた。

・質の良いデータの収集：DLA「読む」の他の技能は、研究自体が後発でまだ多くのデータ収集が必要であるが、今後は如何に質の良いデータを得られるかが課題となる。

・研究体制：本科研では、一つの技能を一人が担当したが、研究全体に整合性を持たせるためには、体制の見直しが必要となる。

・「JSL 評価参照枠」の精緻化：現在の「JSL 評価参照枠」は技能別、全体のものともに、発達に応じた年齢枠が加味されておらず、厳密には妥当性にまだ課題が残る。今後、事例研究を進めることにより、DLA「読む」で一部を示したような精緻化を図ることが課題となる。

・DLA の理論固め：移民等、国境を超えた人々の移動が進んでいる現代社会にあって、DLA は今後国内外で注目されていく言語テストと言える。そのためには何よりも DLA の理論固めが求められる。

#### (2) 研究成果の教育の現場への還元

2014 年 4 月 1 日に「学校教育法施行規則」の一部改正により、日本語指導を必要とする児童生徒への日本語指導が、「特別の教育課程」により正課として位置づけられた。DLA の教育現場への浸透はさらに進むと考えられる。「特別の教育課程」のゴールは、児童生徒自身が、「自律学習」ができるようになることである。そのために必要な、児童生徒

の実態の把握、指導計画の立案や修正、学習の促進、自律学習に自信をもたせることがある。これらすべてに DLA は有効であり、それぞれの現場に合った形で活用が望まれる。これにより、次第に DLA が多くの教育関係者の注目を集めることになってきた。科研の3年間に DLA に対する関心は急速に高まってきた。そこで、科研チームとして日本語教育学会での発表、また、DLA 科研公開研究会を開催し、その成果を教育の現場に還元するよう努めた。

学会での発表は、「5. 主な発表論文等」参照。次に、期間中、年1回次のテーマで「DLA 科研公開研究会」を開催した。

2013 年度 「外国人児童生徒のための対話型アセスメント DLA の開発」(09/15)

2014 年度 「DLA の活用と課題」(02/08)

2015 年度 「特別の教育課程における DLA 活用 -- 実践から見えてくるもの --」(03/13)

詳細は、DLA 科研ホームページ参照。

#### 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計5件)

- 1 小林幸江・菅長理恵・櫻井千穂・永田耕平・伊東祐郎「パネルセッション：特別の教育課程の中での DLA の生かし方」『2015 年度日本語教育学会秋季大会 予稿集』(2015) pp.49-60. 査読有
- 2 真嶋潤子・櫻井千穂・孫成志・于涛「公立小学校における低学年 CLD 児への言語教育と二言語能力—中国語母語話者児童への縦断研究より—」『日本語・日本文化研究』第24号, (2014) 大阪大学日本語・日本文化専攻紀要編集委員会 pp.1-23. 査読有
- 3 櫻井千穂・中島和子「多文化多言語環境に育つ子ども(CLD 児)の読書力をどう捉え、どう育てるか：対話型読書力評価 DRA の開発を通して得た視座を中心に」『日本語プロフィール—研究』第2号 (2014)

凡人社, 招待論文 pp.70-95.

- 4 小林幸江・伊東祐郎・菅長理恵・中島和子・櫻井千穂「パネルセッション：外国人児童生徒のための DLA-JSL 評価参照枠の課題と展望」『2014 年度日本語教育国際研究大会シドニー大会予稿集』pp.49-60. (2014) 査読有
- 5 伊東祐郎・小林幸江・菅長理恵・櫻井千穂・中島和子「外国人児童生徒のための JSL 対話型アセスメント (DLA)」『2013 年度母語・継承語・バイリンガル教育 (MHB)研究会 10 周年記念大会 予稿集』pp.48-49. (2013) 査読有  
〔学会発表〕(計4件)

- 1 小林幸江・菅長理恵・櫻井千穂・永田耕平・伊東祐郎「パネルセッション：特別の教育課程の中での DLA の生かし方」2015 年度日本語教育学会秋季大会

- 2 小林幸江・伊東祐郎・菅長理恵・中島和子・櫻井千穂「パネルセッション：外国人児童生徒のための DLA-JSL 評価参照枠の課題と展望」2014 年度日本語教育国際研究大会シドニー大会

- 3 小林幸江・伊東祐郎・菅長理恵・中島和子・櫻井千穂「外国人児童生徒のための JSL 対話型アセスメント DLA の活用」2014 年度 日本語教育学会春季大会

- 4 伊東祐郎・小林幸江・菅長理恵・櫻井千穂・中島和子「外国人児童生徒のための JSL 対話型アセスメント (DLA)」2013 年度母語・継承語・バイリンガル教育 (MHB)研究会 10 周年記念大会  
〔図書〕(計1件)

- 1 櫻井千穂「第2部 分野別基礎知識—問題解決に向けて：教育編」及び「第3部 50 の専門用語：教育編」杉澤経子ほか2名 監修『これだけは知っておきたい！外国人相談の基礎知識』, pp.70-78. 及び pp.207-217. 松柏社

〔その他〕

ホームページ等

本科研では、「外国人児童生徒のための JSL 対話型アセスメント DLA」のサイトを立ち上げ、期間中の活動を随時公開し更新を行った。

<https://sites.google.com/site/dialogiclanguageassessment/DLAKaken/dlakaken1>

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

小林 幸江 (KOBAYASHI, Yukie)  
東京外国語大学・大学院国際日本学研究院・教授  
研究者番号：40114798

### (2) 研究分担者

伊東 祐郎 (ITO, Sukero)  
東京外国語大学・大学院国際日本学研究院・教授  
研究者番号：50242227  
菅長 理恵 (SUGANAGA, Rie)  
東京外国語大学・大学院国際日本学研究院・准教授  
研究者番号：50302899

### (3) 連携研究者

櫻井 千穂 (SAKURAI, Chiho)  
大阪大学・特別研究員 (RPD)  
(所属は、2016年3月現在)  
研究者番号：40723250  
中島 和子 (NAKAJIMA, Kazuko)  
トロント大学・名誉教授  
研究者番号：70351161